

「恩寵の勝利」

新聖歌

エペソ6：10-24

(1)

「王の心と民の心とは、風に動かされる林の木のように動揺した」(イザヤ7：2)、「これは預言者イザヤの言葉です。今、全世界の指導者とその民の心は、悪性コロナ菌の影響を受けて、風に動かされる林の木のように動揺しています。年明けて、まさかこんな事態を迎えるとは、予期も予想もしていませんでした。さらなる多事多難が待ち受けているかもしれません。M・ルターは「試練のないことが、最大の試練」と申しました。

エペソ書は今朝で最後とします。

エペソ書1章では、天地のつくられるまえから、わたしたちがキリスト・イエスにあって選びと召しに与っていたこと、2章では、神と敵対して歩んでいたわたしたちが、神との和解が成立し、神と平和な関係を回復したこと、4章・5章ではキリスト者の生活の在り方、そして、6章では、「夫婦の関係」「父子との関係」「・」奴隷と主人との関係」など目を留めてきました。

今朝は、エペソ人への手紙の末尾です。手紙の末尾に「追伸」を見ることがあります。そこには、差出人の真意が出ていることがあります。「エペソ書」最後の部分は、手紙の追伸ではありません、むしろ、この手紙のクライ

マックスです」との解説がありました。

「エペソ教会」とは、特定の一教会の意味ではなく、エペソ地方一帯にあったいくつかの教会と理解するのが正しいです。

差出人は使徒パウロです。彼はこの時、エペソの地から遠く離れたローマの地で捕らわれの身でありました。そこから、エペソの教会のみなさんに思いを馳せながら宛てた手紙であります。

「終わりに言います。主において、その大能の力によって強められなさい。悪魔の策略に對して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい」(10-11)。

イスラエルの民は約束の地に入るまで、周辺の異民族と衝突せざるをえませんでした。荒野において、いざ戦わんという時には、合図のラッパを吹き鳴らしました。福音宣教の武將であるパウロが、最後に、エペソ教会のみなさんにラッパを吹き鳴らします、「霊的戦いに備えよ」、「武具で身を固めよ」と命じました。

「御国を来たらせ給え」と祈りますが、坐して祈っていれば、御国が到来するわけではありません。「覆っていて神の国が来るなら、これほど楽なことはありません」とは、ある牧師の言葉です。

何故なら、この書2章15節に、「あなたがたが、責められるところのなほ純心な者となり、曲がった邪悪な時代のただ中であっ

「……彼の間の重のまじりに世に輝いてほしい」との勧めがあります。

昔も今も、変わらぬ「曲がった邪悪な時代」でありますから、戦わねばなりません。しかも、目に見える戦いではありません。わたしたちの格闘は、血肉に対する戦いではない「(12)とあります。

「血肉」「サルクス」は、「人間」とも訳せます。わたしたちの戦いは、「血肉」、人間対人間の戦いに終始してはならないのです。

戦うべき相手は、「主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもう一つの悪霊に対する戦い」とあります。共同訳聖書は、「わたしたちの戦いは、弱い人間を相手にするものではありません」とあります。「弱い人間」同士の戦いではありません。

先に、エペソ2章24節において、「キリストは、敵意という隔ての中垣を取り除いてくださいました」との御言に目をこめました。「敵意」とは、相手が自分にいたくものではなく、わたしのいたくものであると申しました。相手の問題より、むしろ、自分自身の戦いに目を向けなくてはなりません。

「気を付けるがよい。もし互いにかみ合い、食い合っているなら、あなたがたは互いに滅ぼされてしまおうやうやう」(ガラテヤ5:15)。「互いにかみ合い、互いにねたみ合って、虚栄に生きてはならぬ」(ガラテヤ5:26)。弱い人間同士の争いに明け暮れてはならないのゆえ。

(2)

わたしたちの真に戦うべき相手は、「血肉」「弱い人間」ではありません。弱い人間同士が、人生という表舞台で、互いに死闘を繰り返しているだけだとすれば、これほど愚かなことはありません。わたしたちの真の戦うべき相手は、「悪しき霊との闘い」「悪魔の策略との闘い」であります。

「悪魔」について、いままで多くを語りませんが、「悪魔」とは、「人をこころみるもの」です。さらにいえば、「人の背後で讒言(ざんげん)するもの」「人と人との間を引き裂くもの」「人を神から引き離そうとするもの」ともいえます。要は、わたしたちが、人の悪しき面しか見えないような時、お互いを上手にあやつっている悪しき存在に気付かなくてはなりません。

ドイツのウィッテンベルク城の壁には、宗教改革者のM・ルターが、悪魔を目がけて投げつけたインクの跡が残っているといわれています。それほど、リアルに、悪しき霊の存在を実感していたようです。人の見えざる背後にあって、巧妙に操ろうとしている悪しき霊の存在に注意しなくてはなりません。

目に見える相手を「自分の敵」であると思いつけば、いつの間にか、自分も相手も、気づかないうちに悪魔に取り込まれてしまいます。ミイラとりがミイラにならねませぬ。

わたしたちの戦いは、血肉対血肉、人間対人間の戦いではありません。時「、自分が正し

い主張したり、正しく振る舞いをしている  
と確信しているような時が、むしろ、最も危  
ないといえます。そうした時こそ、この間  
にが悪しき霊に取り込まれているからです。  
戦うべき相手は、自分の中に潜んでいる悪し  
き霊との戦いでもあります。」悪魔は光りの天使  
に偽装する」ともいわれます。悪しき者が恐  
ろしい形相で近づくとはいえませんが、むし  
ろ、「ニコニコしながら近づいてくるのではな  
いでしょうか。最近、「おれおれ詐欺」で、4  
000万も騙し取られた老婦人がおりました。  
「悪魔は名刺を出さない」と言います。悪魔  
は優れた知恵者です。

現在、中国において、経済活動の自由はあ  
りますが、思想・信条は厳しく統制されてい  
ます。国際電話もメールまでもどこどこへチ  
ェックされます。福音の門戸は固く閉ざされ  
てはいるのですが、にもかわらず、全世界の  
キリスト者は、いずれ、門戸が開かれ、自由  
に宣教できる日を待ち望み、様々な準備をし  
ています。中国全土には、今も5千万とも6  
千万ともいわれているキリスト者がいるとい  
います。

香港を訪れた時、荘宣教師にお目にかかっ  
たことがあります。中国の「地下教会」・「家  
の教会」は、スピードをあげて広まっている  
といえます。別れ際に、「わたしのためにも祈  
りつなさい」と請われました。インドネシア  
で宣教の経験のある奥山実牧師と、その後継  
者の安海宣教師は共に、「インドネシアでは、

「悪霊」と「反キリスト」の働きの著しさを  
証しております。

日本に来ている韓国の牧師が多くなりまし  
た。同盟教団には40人ほどいます。20年  
後には、日本の教会の半分は韓国の牧師にな  
るのではないかと予測している人がおられます。  
確かに、そうした勢いを感じます。

ところが、日本に住みつき、しばらくする  
と、「以前のように祈れなくなった」と悩む韓  
国の牧師と出会いました。その後、一時韓国  
に帰国して、一週間祈祷院で祈ったというの  
です。ところが、どうしても以前のように集  
中して祈れないということです。日本に身を  
おくと霊的ダウンを覚えると言っています。

ヨハネ黙示録において、復活されたイエスキ  
マが、「わたしは死と黄泉(よみ)との鍵を持  
っている」(黙示録1:18)と申しながら、  
小アジアの7つの諸教会を巡り歩きました。  
その最後がラオデキヤ教会でした。

「あなたは、豊かになった、何の不自由もな  
いと言っているが、実は、あなた自身がみじ  
めな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見  
えない者、裸な者であることに気付いていな  
い」。まことに手厳しい警告です。経済的  
豊かさ、霊的豊かさは、必ずしも比例し  
ない、いえ、むしろ反比例するようです。

以前、韓国は霊的王国・イスラエル、そこ  
で、日本は経済的大国・「エジプト」(「ミシ  
ラム」と比較されていたことがあります。  
韓国において熱心に祈れた人も、日本に来る

と、次第に祈れなくなるといふのです。「水と

平和はただの国」「リタヤ・ヘンサタン・山本七平」とまで言われた日本です。「コン」が全国に張り巡らされています。わが身の安心・安全が保障されていると知れば、祈らなくとも、何とか生きることができます。

「士師記」に12人の士師たちが登場します。その内の一人が、大力の持ち主「サムソン」です。その彼の大力の秘密は、豊かな七房の頭髮にありました。ところが、敵国・ペリシテ人の「デリラ」に心奪われて、彼女の膝の上で寝込んでいた時、7房の髪の毛を切り取られてしまいます。その瞬間、「サムソンから神の霊が取り去られた」とあります。7房の髪の毛を切り取られたサムソンの姿とは、霊的力を奪い取られたクリスチャンではないでしょうか。

マルコ福音書5章には、夜風絶えまなく墓場や山の中で、叫び声を挙げ、石で自分の身体を傷つけ、墓場を住処(すみか)にしていた狂人の男が登場します。彼の名は、「リギオン」。「リギオン」とは軍隊の一個師団の名称です。約五千とか一万の軍隊です。

「リギオンほど多くの悪しき霊に取り憑かれていた男の内なる霊が、何とフタ二千匹に乗り移り、崖からなだれを打って湖に落ち込み、悪しき霊どもがこごとく追いつかれたとあります。それにして、一人の人間に、「リギオン」とは、少々、オーバーではないかと思われるかもしれません。いえ、むしろ、それ

がわたしたちの現実なのかもしれません。

一人の人間に五千もの悪しき霊を宿しているとは信じがたいことです。ところが、それを自分自身と信じた方がおりました。頭は角刈り、顔は浅黒く、その風貌から、ダンブの運転手と思われました。その彼が、礼拝後の求道者会で、わたしが奇しくも、開いた聖書箇所といえば、マルコ5章の箇所でした。しばらく共に目についているうちに、「リギオンとはわたしのことですか」と尋ねる彼、しばらく深く頭を垂れて、「墓場を住処にしていた狂人とは、現在のほくと思えます」と告白しはじめました。後に、洗礼を受けましたが、実は彼は少学校の現役教師でした。しかも後でわかったことですが、東大の哲学科卒でした。

(3)

わたしたちの戦いは、なま易しい戦いではありません。「もろもろの支配と力・権威との暗やみの世界の支配者、また、天にいるもろもろの悪しき霊との戦い」。

「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、固く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい」(1)(3)との勧めが続きます。

しかも、完全武装です。「帯」「胸当て」「膝当て」「大盾」「兜」「剣」という六ポイントの重装備です。これは、当時の羅馬兵の典型的な軍隊の装備でした。六つの武具には、防御用が5つ。攻撃用が1つです。

「守り」は大事です。しかし、大相撲の引退

力士が、「彼は勝ち味が遅いですなー」という解説をしていました。勝ち味が遅くて勝てる相撲に勝てない、攻めるタイミングを失っているとの指摘です。守るだけでは「勝ち味が遅いですなー」と言われかねません。

キリスト者の唯一の攻撃用の武器といえれば、「神の御言」それが「剣」です。

「神の言は生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭くて、精神と靈魂と關節と骨髓とを切り離すまでに刺し通して、心の思いと志しとを見分けることができる」(入フル4：12)。

神の御言を握り締め、悪魔の胸元目がけて、剣である神の御言をグサリと突き刺します。

ダビテの生涯について学んだ時、巨人「コリアテ」に立ち向かった少年「ダビテ」の話をしました。ダビテは河原から「滑らかな石5つ」を袋に入れて、巨人「コリアテ」に立ち向いました。「滑らかな石5つ」とは、神の御言5つを手にしたことではないかと申しました。いざという時の備えとして、諳んじている5つの御言を常備袋に入れておくことが大切と申しました。

主イエスが公生涯の始めに、荒野において誘惑を受けておりますが、誘惑に打ち勝った秘訣といえは、何か特別な武器、特殊な手段を用いてはいけません。

「人はパンだけで生きるものではなく」

「生けるあなたの神を試みてはならぬ」

「ただ、主なるあなたの神のみに任せよ」

この申命記の三つの御言により、悪魔の誘惑に勝利したのです。わたしたちが、誘惑に勝ち得る最も有効な攻撃用の武器は、「御霊の剣」・「神の御言」であります。それで、イエス・キリストが勝利したのですから、わたしたちも同じ手段を用いなくてはなりません。

さらに注意すべきことは、剣が鞘(さや)の中で錆びないように、何時も手入れして、切れ味鋭い剣として磨き上げておき、イザという時は、サタンの喉仏目がけて、エイッと切り込まねばなりません。

さらに、18節には、「どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽し、また祈りなさい」と勧められています。

牧師の手に行っている武器といえは、「神の言葉」と「祈り」だけあります。それ以外の特殊な武器を持ち合わせてはいません。この二つをフルに活用しながら福音宣教の戦いをしてきました。

使徒パウロは、シシトの海岸で、エペソの長老達と最後の別れをする時、「だから目をさましていなさい。そして、わたしが3年間、昼も夜も涙をもってあなたがた一人一人を絶えずさとしてきたことを忘れないで欲しい。今わたしは、主とその恵みの言葉にあなたがたを委ねます。御言には、あなたがたの徳を立て、聖別されたすべての人々と共に、御国を継がせる力があります」との言葉を残して

おのたまは、「御」と「祈」の「S」の「つ」の  
おのたまは、

「腰には真理の帯を締め」

「胸には正義の胸当てを着せ」

「足には平和の福音を備えはせ」

「信仰の大盾を取れ」

「救いのかばいをかばえ」

最後は、「御霊の与えられたおのたまは、

神のまことばを取りなせよ」といいます。

御言と祈りとを「ワンセット」にして闘うのであ  
ります。キリスト者の最大の誘惑は、自分の  
力だけで勝とうと試みることです。また自分  
で勝てると思ひ込み、自分で勝たねばならぬ  
と思うことです。試みの誘惑に勝利したイエ  
ス・キリストから目を離さないようにしな  
うてはなりません。

「勝利を得る者には、神のパラダイスにあ

るこのちの木の果を食ふべし」といいます。

(2:7)

「勝利を得る者にはマナを与えよ」といって勝  
利を得る者には、神の聖所における柱にして

「黙示録の：：の柱」

「勝利を得る者には、わたしの座に着かせ

よ」といいます。

「勝利を得る者には、わたしの座に着かせ

よ」といいます。

勝利の「つ」の「S」の「つ」の

新聖歌4544番

【おのたまの祈り】

天のお父さま、

おのたまは、誘惑から勝てばよいと  
思ふ。そのため、祈りと御言との「つ」の「S」  
勝利の「つ」の「S」の「つ」の「S」の「つ」の  
イエス・キリストの名に祈ります。「ア  
メン」